

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.46)

「踊りを覚えたものは、寝ながらも踊る」

・・・ゲラゲツア祭りで伝統継承を考える・・・

メキシコでの日常的な過ごし方は、与えられたミッションとして大学で講義するか、後はそれに備えての資料作りなどである。残り少なくなった派遣期間も、これの繰り返しかなあ〜などと考えると、無性に何処か普段と異なった所へ行きたくなった。

日本は、時あたかも、季節の暑さもさることながら、各地の夏祭りも佳境を迎えて、人々が熱くなっていることだろうなどと思い浮かべ、

「そうだ、ゲラゲツアを見にオアハカへ行こう」と、相成った次第である。

ゲラゲツアとは、複数の言語と異なった文化や民族衣装を持つ、オアハカ州の7つの地域から、郊外にあるフォルティン丘に集まり、

毎年7月に催されるお祭りである。ただし今年は、諸般の事情により別の所にあるサッカー場で行われた。

元々は農民が作物の収穫に感謝する行事らしく、オアハカ州の各民族がそれぞれの地域から収穫された農産物を携え踊る祭りであった。

しかし、スペイン人による征服後は、カトリックの信仰との融合がなされ、今はオアハカ州の人々が、舞踊や音楽を通じて、民族の伝統や習慣を皆に伝えるため、各地域が夫々工夫を凝らし、伝統を加味した独自の民族舞踊を披露するようになっている。

さて、会場に入ってみよう。各踊りについて、説明されても歴史などを知らないと余り理解できない動作、説明されなくても分かりやすい動き、とつてもコケティッシュな仕草、葬式に参列しているのではないかと思われる、静かな儀式を取り入れた踊りなどが、色とりどりのカラフルな衣装とマッチングして繰り広げられる。

牛に扮した女性が、闘牛士に扮した男性に打ち勝って、舞台から蹴落とししたり、男性の求愛の言葉を面白おかしく罵って拒絶する、男女の恋の駆け引きなど、女性の強さを表した踊りに、観客席からは思わず大きな笑い声と拍手が響く。

スペインが侵略した当時を表した踊りは、本当はスペインの征服者達と、先住民の闘いを表していると思われるのだが、どこにもその様子は見られない。しかし、その苦難の歴史を、目に見えない心の奥底に仕舞い込んでいるかのごとく、何かを訴えているようには感じられるシーンであった。

いよいよフィナーレに近づいて来たなど、実感させられるのは、30人近い踊り子が肩にパイナップルを担げ、各々が手の込んだ刺繍のカラフルな民族衣装を身につけて、ラインダンス風に踊る姿で、まさに圧巻という言葉がふさわしい。

一つの踊りが終わると、その地域から持ち寄った果物、帽子、菓子、メスカル(テキーラと同様にアガベなどリュウゼツランから作る蒸留酒)などの特産物や、踊りに使った小道具などを客席に向かって投げ入れてプレゼントするので、そのたびにステージ付近の観客は総立ちとなって奪い合いとなる。





このアドバンテージを得るのは、当地の生活水準からしてやや割高の料金を払って、ステージ付近の入場券を手に入れた人達だ。幸いにもこの恩恵に浴した席に座っていたので、さ～、とばかり、始まった奪い合い合戦に参加した。

老若男女、大人も子供も交じり合う争奪戦のなか、ボラッチョ氏は日頃のヨボヨボ、よたよたぶりもかなぐり捨てて、何回かの投げ入れの内、トータルで、パン、ソムブレロ(帽子)、メスカルの小瓶、数個の飴などをゲットした。

「みっともないことをするな」と、お叱りを受けそうだが、場に溶け込むのも重要だろうし、高価なものではないものの、このような機会に手に入れたということは、人間心理として何となく心楽くなる。

もっとも、そこまで奮闘して獲得した物も、何も取れなかった周囲の人にやってしまうなどして、結局持ち帰ったのはメスカルの小瓶だけである。これも、呑み助の矜持か？

ボラッチョ氏が行っている技術協力も、相手がこのように喜びを感じてくれれば、オアハカ地域の先住民のサポテカ語で、贈り物、奉仕、人々の交流、相互扶助などを意味する、ゲラゲツアの精神と相通ずるものなどと思いつつ、子供の頃、近所の新築の家で「建てまい」と称した棟上式の時、大工が立ち上がったばかりの棟から餅を投げ、それを拾いあつた光景ともダブってきた。

「俺様も年をとってひねてきたにしては、子供の頃の思い出も、少しは頭に残っているのかなあ」などと、祭りの喧騒の中で、一瞬時が止まったごとくしばらく感慨に耽っていたが、旅は時にはメランコリックな気分させるものだ。

さらに、「**Quien está hecho a bailar, baila durmiendo**」(キーエン エスタ エッチョ ア バイラール バイラ ドゥルウミエンド)と発音し、直訳的にはタイトルのとおり諺を思い出した。日本語の諺では何に相当するのだろうか。小鳥のニュアンスは何もないが、「雀百まで踊りを忘れず」という言葉を無理やりに当てはめてみるか。いや、そんなことは今は問題ではない。ファンタスティックな踊りの場にいることが重要なのだ。

日本では伝統芸能の継承はなかなか大変だという。構造改革の名の元で、競争社会、市場原理主義、自己責任論などが跋扈する社会においては、地域共生共栄社会を形成するための一種の潤滑油として、良き伝統は第三者的な立場で見れば、守ってもらいたいものだ。

しかし、地元の人にとって見ればそうともいえず、時代の進歩、開発とは相容れないものとなっているのだろう。多分このフェスティバルも実態は本来の目的を通り越して、イベント化した踊りになっているなどと言え、伝統芸能への冒涇になるだろうが、出演者自身はそれこそ踊りを覚えた者として、夢の中でも踊るほど練習したのではなかろうか。

この度の旅行は、周辺の世界遺産へ登録されている、古代遺跡などもあわせて見学したが、中世から近代へ、歴史の流れをタイムマシンのように感ずるような旅であり、伝統の継承と近代化とは何か、いつものテキーラの代わりに、特産のメスカルの杯を傾けながらじっと考えた。

(2010年7月29日、今週も国立工科大学で3日間の講義を行っています)

次のページへ続く



新聞に載ったゲラゲッツアの会場の様子



祭りの2日前に行われた市内パレードの様子



祭りの前夜に行われた、DONAJI 伝説ショー



観客も佳境になるとスタンディングオーベーション



踊りが終わると、ショーに使った小道具や特産品の食べ物等を、観客席に投げ入れる

次のページへ続く



パイナップルの踊り